

関西でも「友の会」発足

目の難病、加齢黄斑変性の患者や家族約30人が「関西黄斑変性友の会」を発足させ、11日に初めての交流会を開く。代表世話人の高田忍さん(74)は「西宮市」は「情報交換しながら治療に役立てたい」と話す。

加齢黄斑変性は、物がゆがんで見える症状から次第に視野の中心部が欠け、最悪の場合は失明の恐れもある目の病気。網膜の奥にある直径6ミリのほどへのこんだ部分「黄斑」に異常が生じ、視細胞を保護する「網膜色素上皮細胞」を傷つけることが原因とされる。

目の難病 加齢黄斑変性



「血液のがんで亡くなった妻を看病していたとき、患者会から情報が役立った。その経験から会を発足した」と話す高田忍さん＝神戸新聞社

加齢黄斑変性の二つのタイプのうち、滲出型は目の薬剤注射などがあるほか、神戸・ポートアイランドにある先端医療振興財団と理化学研究所多細胞システム形成研究センターなどが、人工多能性幹細胞(iPS細胞)を活用した治療法開発に取り組んでいる。一方、萎縮型は現在のとこる有効な治療法はない。高田さんは滲出型の患者で注射治療を続けている。2011年9月に東京で発足した「加齢黄斑変性友の会」と交流を続けてきたが、関西での拠点の必要性を感じ、約1年半前から準備してきた。今後は年2回の定

11日、大阪 交流会開催、情報共有へ

期交流会のほか、会報を発行予定。「この病気はまだまだ分からないことが多く、患者同士が協力して有効な情報を共有したい」と話す。

交流会は11日午後2～4時、大阪市中央区中之島5、住友病院講堂で開催。同病院の五味文・眼科診療主任部長が「加齢黄斑変性について」と題し、診断と治療のほか、日常生活での注意点やロビションケア(眼の機能の活用法)について講演。質問にも答える。

参加には、友の会費(4千円)と交流会費千円が必要。申し込み、問い合わせは高田さん ☎090・6905・0872

(片岡達美)